

龍谷顕真会会報

もくじ

平成13年度総会グラフ	2
平成13年度会員活動報告	3～9
平成13年度総会記念講演内容	10～13
第1回研修会レポート（記念講演内容、参加者研修報告）	14～29
平成13年度事業報告、会員動静	30



第1回研修会 山口きらら博会場にて

本年度から国内を会場に地方研修会を開き、研鑽及び情報交換の場をもった。

第1回目は第2ブロック（山口教区）において実施。8月の猛暑にもかかわらず、多くの参加者が集い、山口放送顧問磯野恭子氏の講演、山口きらら博の視察などを行った。初めての試みということで、不安な面もあったが、担当ブロック会員方のご協力・お力添えにより、大変有意義で充実した研修会とすることができた。

一方、10月実施予定であった第9回海外視察（カナダ開教区）は、米国同時多発テロ事件による国際情勢悪化等のため、残念ながら中止とした。

私は、平成7年の第3回海外視察（台湾）に参加させていただき、4日間、会員の皆様と行動を共にし、店舗の看板を見ながらその商売を当てたり、博学の代表世話人に色々と教えていただいたりと、忘れられない思い出の旅となっている。

宗祖親鸞聖人のみ教えのこころを政治の場に反映させたいと、代表世話人をはじめ世話人の方の意気は盛んである。事務局としても、時代に即応した事業内容の検討、また活動内容を広く周知すべく、新たな視点とアイデアをもって取り組んでいきたい。今後も宗祖のお心を体して、地方自治体の振興に取り組みたいと願っている。

平成 13 年 度 総 会 グ ラ フ



代表世話人挨拶



功労者表彰式 (川越眞前代表世話人)



総 長 挨 拶



記念講演講師 中垣昌美氏



懇 親 会

平成13年度 会員活動報告

会員44名のうち27名より「活動報告書」の提出がありました。
尚、無記入箇所は記載いたしておりません。

- ① 議会役職
- ② 所属委員会役職
- ③ 地域団体役職
- ④ 所属党派・役職
- ⑤ 本年度取り組んでいる事柄
- ⑥ 今後取り組みたい課題
- ⑦ 抱負・モットーなど

柴田 薫心
札幌市議・六期
北海道・札幌・宝流寺前住職

- ① 自民党評議員会顧問
- ② 総務委員会
- ③ 札幌市連合町内会顧問
- ④ 自民党札幌市連会長代行
- ⑤ 冬雪税導入についての論議
- ⑥ 少子化対策

櫻田 正弘
北見市議・八期
北海道・北見東・本覚寺衆徒

- ① 議会議長
- ② 産業経済常任委員会
- ④ 自由民主党
- ⑤ 市民のために開かれた議会
議会改革
- ⑥ 青少年健全育成

萱森 真雄
横手市議・三期
東北・秋田・専光寺住職

- 花本 肇正
大島町議・六期
高岡・射水・称念寺住職
- ① 議会議長
- ② 文教厚生常任委員
- ③ 教区会議員

射水郡町村議長会副会長
町国保運営審議会会長
町都市計画審議会委員・公害対策委員

同農業振興委員会委員

④ 自由民主党射水郡連合支部幹事長

大島町支部幹事長

富山県第三選挙区支部幹事

総務会総務

- ⑤ 高齢者福祉施設の充実
公共下水道事業の拡大
都市計画道路の改修整備
- ⑥ 市町村合併対策
広域圏議会定数問題
- ⑦ 住民の声を政治に反映
信頼と友情と協調を大切に

嶋田 政憲
勝山市議・五期
福井・福井・本覚寺衆徒

- ① 議会選出監査委員
- ② 建設企業委員会
総合行政審議会
- ③ 中部縦貫自動車道鹿谷町促進対策委員会会長

中山林道愛護組合組合長
勝山さつき愛好会会長

- ④ 自由民主党
- ⑤ 高規格道路の早期
インター周辺地の将来計画
市の総合行政(10年)実施計画
中部縦貫道の早期完成

⑥議会改革

勝山市街地活性化の問題

⑦誠実・対話の実行

井上 馨

勝山市議・一期

福井・円陵・巖教寺衆徒

①議会だより編集委員

②建設企業委員会委員長

総合行政審議会

③勝山市荒土町壮年会会計幹事

④無所属

⑤ごみ問題

都市公園の整備

都市と地方の関係

地域における産業（企業誘致活動）発展

⑥地域における交通体系

冬期国体誘致活動

都市と地方の関係

⑦報恩感謝

「自らの実践が新しい郷土を生み出す」

中田 宗人

明宝村議・六期

岐阜・郡上・圓光寺住職

横山 善道

伊自良村議・二期

岐阜・黒野・金證寺住職

①議会副議長

②産業建設委員会

郡体育協合理事長

郡交通安全協会伊自良支部長

山県テニス会長

④無所属

山県郡合併問題

南北小学校統合問題

高齢者福祉

⑥教育（学校）

環境問題

松井 靖典

河合村長・三期

岐阜・飛騨・願教寺住職

①河合村村長

②道路整備促進期成同盟会岐阜県連合協議会副会長

岐阜県山林協会副会長

岐阜県過疎地域自立促進協議会副会長

③無所属

④平成11年9月15日豪雨災害復旧

環境立村の具体的推進

デジタルアーカイブの構築

子どもたちの自然体験「うるるん村」開村

⑤青少年の自然体験の推進

市町村合併

⑥雪へのこだわり

小さいことへのこだわり

創意工夫へのこだわり

寺本 克磨

川越町議・一期

東海・朝明・法雲寺衆徒

①議会運営委員会委員

②教育・民生常任委員会委員長

議会だより編集委員会

都市計画審議会委員

③社会福祉協議会理事

介護保険事業計画策定委員会委員

④無所属

⑤ISO14001認証取得活動のフォロー

ごみ削減への活動のフォロー

議員定数削減について

⑥広域行政化と市・町合併についてどうまとめるか

行財政改革のための各種施策の立案等

⑦地方自治体として分権活動の行使について、

改革をモットーとして諸問題について具体的に改善活動を推進したい

山田 眞澄

東員町議・十一期

東海・員弁・浄源寺住職

①経済土木常任委員会委員長

議会運営委員会委員

④無所属

大塚 泰雄 安曇川町議・一期

滋賀・高島・通安寺住職

②総務民教常任委員会副委員長

町村合併検討特別委員会

基地対策特別委員会

③安曇川水系治山治水期成同盟会委員

総合交通体系審議会委員

公共下水道事業審議会委員

国民健康保険運営協議会委員

教区基幹運動推進委員会委員（研修部会所属）

高島組副組長（組相談員）

滋賀県高島郡仏教会幹事（事務局長）

福祉施設評議員

苦情解決委員会第三者委員

地区小学校評議員

地区小学校同窓会顧問

④無所属

⑤町村合併問題の研究・検討

青少年教育問題

介護保険制度その他福祉に関する研究

町の危機管理体制の整備

湖西地域振興施策の研究・検討

⑥幼・少・青年の心の教育問題

高齢者対策の充実

迷信の打破

憲法（信教の自由等）と宗教教育との関係

の研究・検討

政教分離の原則の追求（公明党、創価学会等の動向把握と研究

⑦こどもに夢を、おとしよりに希望を、そしてみんなに安心を！

安全で安心して暮らせる町づくりの実践！
口にはお念仏を、心に仏さまを！（心に仏を、口にはお念仏を！）

まことの僧侶に、門信徒になろう！

お寺はこころの病院です！（苦しみ悩み110番活動の展開）

北川 眞道

秦荘町長・四期

滋賀・愛知上・浄甫寺住職

①秦荘町町長

③滋賀県町村会会長

日本赤十字社滋賀支部副支部長

近畿地方交通審議会特別委員

びわこ放送株式会社取締役

滋賀県公立学校施設整備期成会会長

滋賀県町村議会議員公災組合議長

④無所属

⑤温水プール建設

公共下水道事業町全域本年10月完了

福祉の充実

生涯学習の振興

⑥身体障害者のグループホームの建設

痴呆性老人のグループホームの建設

黒田 昭信

滋賀県議・三期

滋賀・犬上南・教得寺住職

①議会議長

②総務企業常任委員会

③滋賀県道路協会会長

滋賀県砂防協会会長

滋賀県河港協会会長

滋賀県緑化推進会名誉会長

北方領土返還要求運動滋賀県民会議会長

部落解放基本法制定要求国民運動彦根犬上

地区実行委員会会長

④自由民主党

⑤県民から信頼される議会運営

人口の増減による議員定数

⑥県土の均衡ある発展と経済対策

⑦不言実行

和をもって貴しと為す

梅津 正純

山東町議・二期

滋賀・山東・寶安寺住職

①総務文教委員会委員長

議会運営委員会委員

②総務文教委員会

議会運営委員会

③滋賀県湖北広域行政委員会議員

滋賀県坂田郡広域行政委員会議員

④無所属

⑤町村合併への取り組み

山東町内四幼稚園の統合（平成十五年開園に向けて）

町内上水道の軟水化事業（マック方式を取り入れて実施する）

⑥⑤の課題の完遂をめざす

⑦環境にやさしい町づくりをめざすひと・もの・自然

山本 隆俊

茨木市議・一期

大阪・茨木東・称名寺住職

①民主産業常任委員会委員

②民生委員推薦委員会

③地元地域（総持寺二丁目）自治会長

三島地区連合自治会副会長

三島地区公民館運営委員長

④無所属

⑤「二十一世紀こそ浄土真宗の出番」というテーマで各地で講演をしております。

茨木市議会では地方分権について問題提起しております。

⑥各行政区に住職議員を送り出し、二十一世紀の福祉と共生の時代に対応しうる浄土真宗教団を確立し、蓮如上人の二十一世紀型「講」を地域社会に定着させたいと思つて

います。

⑦社会性を備えた真宗教団確立に向け、地域や議会で頑張りたいと思つています。

正しい意味での政治的影響力を持つ教団を確立するために、顕真会の発言力を更に強化し、各地で住職議員育成に教団あげて取り組んでいきたいと思つています。

波多 正文

尼崎市議

兵庫・阪神南・正光寺住職

谷川 正秀

尼崎市議・三期

兵庫・阪神西・万徳寺住職

藤本 和人

市川町議・二期

兵庫・神崎・妙楽寺住職

②文教厚生常任委員長

議会広報編集委員長

③中播シルバー人材センター理事

④無所属

⑤ごみ処理場（クリーンセンター）建設

ごみ最終処分場（埋立地）建設
ごみ減量化問題

⑥下水処理問題

人権問題

⑦念仏の心を政治に反映

小泉 玲子

御津町議・三期

兵庫・網干・浄泉寺衆徒

①福祉厚生常任委員会委員長

議会運営委員会副委員長

③社会福祉センター運営委員長

民生委員推薦委員

④無所属

⑤町合併50周年記念事業の実施計画

情報公開条例の施行

政務調査費の条例制定に向けて

御津小学校屋内運動場の改修計画

ごみ対策とリサイクル

⑥御津病院の健全育成（長期療養型病床も取り入れては）

リニールアルオープンした国民宿舎の経営（ホームページ開設）

町営住宅の建設

⑦住民の皆さんの声を聞くため各種イベント、

会合には積極的に参加する

窪田 享信

温泉津町議・三期

山陰・大家・願林寺住職

②経済常任委員会

③部落解放基本法制定要求国民運動島根県実行委員会会長

④無所属

⑤議会報告「共に」つうしんの発行（年4回）

- ⑥「人権擁護条例」の制定
⑦「共に考え、共に学び、共に取り組み、共にぬくもりのある町を」

竺川 紹隆
金城町議・五期
山陰・福屋・浄光寺住職

- ①議会運営委員
②総務常任委員会委員長
④無所属
⑤広域行政、合併問題
⑦政教、人権の問題

小原 美智子
美都町議・一期
山陰・三隅・妙蓮寺衆徒

- ②総務常任委員会委員
③美都町連合会婦人会会長
美都町女性団体連絡協議会会長
④自民党美都支部女性局長
⑤環境問題（生ごみの堆肥化）
高齢者問題（痴呆の人の心のケア）
⑥医療と宗教と行政の関わりについて
男女共同参画社会実現に向けて
⑦男女共同参画社会の基本は夫婦・家庭から

藤谷 一剣
匹見町議・三期
山陰・益田・蓮長寺住職

藤谷 光信
山口県議・三期
山口・岩国・教蓮寺住職

- ②農林水産委員
③岩国市文化協会会長
山口県演劇協会会長
岩国商工会議所顧問
山口県立シンフォニア（文化会館）運営委員長
長

- ④民主党県連副代表
⑤地域振興について
農林水産振興について
文化行政全般について
⑥教育と文化について
⑦仏法を聞くこと
地域社会に貢献する

熊谷 宗圓
岩国市議
山口・岩国・西福寺住職

- ①監査委員
②総務委員会
③山口県吹奏楽連盟副理事長
岩国刑務所篤志面接委員
社団法人全日本吹奏楽連盟中国支部理事
岩国楽友協会会長
山口県音楽協会常任理事
財団法人岩国の文化を育てる会理事
岩国幼稚園協会会長

財団法人山口県幼稚園協会副理事長
全日本私立幼稚園連合会評議員

- ④自由民主党
⑤教育改革の推進
財政改革
公務員の意識改革
⑥社会道徳・秩序の樹立
⑦出来ることからすぐに実践

米沢 痴達
徳山市議・一期
山口・熊濃・真光寺住職

- ②文教厚生委員会
合併調査特別委員会
③社会福祉協議会理事
コミュニティ理事
④無所属
⑤環境・命の教育（総合学習の充実）
高齢化社会におけるこれからの福祉政策
⑥⑤に同じ
⑦一期一会

島田 明
山口県議
山口・防府・善正寺住職

- ①議会議長
②総務委員会
③山口県保育協会顧問
山口放送取締役

中国電力顧問

防府市立華陽中学校後援会長

山口県自家用車協会会長

日本ボーイスカウト山口県連盟中部地区協議会会長

山口県トラック協会会長

ボーイスカウト防府第4分団委員長

④自由民主党顧問

弘中 正俊

防府市議・一期

山口・防府・乗圓寺住職

久保 玄爾

防府市議・五期

山口・防府・信行寺住職

①議会議長

②総務委員会

④自由民主党

⑤環境（河川・森林等）

⑥介護問題

秋里 勝道

美東町議・五期

山口・美祢東・明楽寺住職

①議会副議長

②経済建設委員会

④無所属

⑤集落排水事業

⑥ダム問題

川越 正信

美祢市議・一期

山口・美祢西・西音寺衆徒

②教育福祉委員会副委員長

③大嶺町社会福祉協議会理事

④無所属

片山 隆昭

豊浦町議・一期

山口・豊浦西・心光寺住職

②文教厚生委員

④無所属

井上 隆純

豊浦町議・一期

山口・豊浦西・正音寺住職

②総務委員会委員

議会広報委員会委員長

③まちづくりグループ「発揮会」会長

山口教区豊浦西組門信徒部長

④無所属

⑤男女共同参画社会推進への取り組み

環境保全対策

情報公開

行財政改革

観光開発

行政への電子化

⑥学校教育の充実

生涯学習

介護と福祉

少子高齢化対策

⑦私の目指す二十一世紀へのまちづくり

く地方分権、少子・高齢化、男女参画、環境保全時代への積極的取り組み

21世紀の町を担う郷土愛あふれる心豊かな豊浦人の育成

地場産業の振興と経済基盤づくり

市民文化活動、芸術活動の活発な町づくり

町民が生き活きと安心して暮らせる町づくり

り

少子化・高齢化への積極的取組みと老若男女が共生できる町づくり

開かれた行政・福祉サービスの推進

自然環境と開発の調和をはかり、緑と花のあふれた美しい町並みの形成

豊浦町の町の個性、魅力づくりへの取り組み

み

荒木 行也

高田町議・四期

福岡・三門南・阿弥陀寺住職

①議会議長

③山三保育所連盟会長

筑後地区保育所連盟会長

福岡県保育所連盟副会長

日本保育協会福岡県副会長

④無所属

④無所属

④無所属

④無所属

④無所属

⑤有明海の環境浄化

⑥下水道事業

市町村合併問題

⑦約束実行

谷川 通澄

大和町議・三期

福岡・三門北・至徳寺住職

衛藤 龍天

久住町長・五期

大分・岡・安照寺前住職

③大分県町村会長

直入郡町村会長

④無所属

⑤町役場庁舎建設

⑥市町村合併（総論賛成、各論困難）

急増する入込観光客と住民との交流（久住
高原への客が20万人から230万人となった）

⑦平常心

一意専心

志賀 信之

朝地町議

大分・岡・西蓮寺住職

傍示 暢昭

佐賀市議・一期

佐賀・巨瀬・正見寺住職

②総務常任委員

新焼却炉調査特別委員会委員

③町防犯協会長

市防災会議委員

部落差別撤廃審議会委員

佐賀いのちの電話監事

④無所属

⑤青少年健全育成

カウンセラー養成

農村活性化

タウンモビリティ推進

バリアフリー社会の実現

少子高齢化問題

⑥行財政改革

歴史教科書問題

⑦議会の中の念仏者

片山 正純

諫早市議・二期

長崎・諫早・明教寺住職

①議会運営委員会副委員長

②総務文教委員会

④自由民主党組織副委員長

⑤仮称「森林水源涵養税」設置

⑦義務が先、権利は後

隈部 弘正

菊鹿町長・二期

熊本・山鹿・光嚴寺住職

①菊鹿町町長

④無所属

⑤人づくり事業

多目的体育館、保健福祉センター等

環境保全事業

⑥町のキャッチフレーズ「かがやきの郷きく
か」（自然がかがやき、1人ひとりの命が
かがやくような町づくり施策）

⑦一住職の生き様として行政を通して、自信
教人信の心をふまえながら、少しでも人々
の幸せの歩みのかけ橋となれたらと願って
いる

長嶺 興也

中央町長・二期

熊本・益南・善林寺住職

崎田 要司

清武町議・五期

宮崎・宮崎・長明寺住職

椎葉 淨信

椎葉村議

宮崎・椎葉・稱専坊衆徒

平成13年度総会記念講演

講師 略歴

中垣 昌 美（なかがき・まさみ）

仏教社会福祉の可能性

龍谷大学名誉教授・
四天王寺国際仏教大学教授

中垣 昌 美



皆さん、本日はご苦勞様でございます。

今年の総会のお席にご縁を頂きましたこと誠に有り難

く、大変光榮に存じております。

昭和三十年に龍谷大学文学部研究科で「社会事業の本質と近代的性格に関する一考察」という論文を提出して以来、ずっと今まで欧米を含めて内外の社会福祉、特に社会福祉の勉強をさせていただいたわけですが、本日は時間的にも制限されていますので、仏教社会

福祉の可能性について、そのエッセンス部分だけをお話いたしますことをお許し頂きたく存じます。

昨晚も、聞法会館でビハラの講座にて、「社会福祉と援助技術」の講義をしておりますが、本日お集まりの皆さまは、議員という公職選挙法に基づく責任ある公職にあって、国民の福祉を真剣に考えて頂く立場においての方々であるとともに、政策策定サイドに位置づけられる方々ですので、援助技術と言った方法論よりも、むしろマクロの視点から現代仏教福祉の可能性と課題について問題提起させていただくというかたちで進めさせていただきますと思います。

昭和五（一九三〇）年、大阪府大東市生まれ。龍谷大学文学部研究科（旧制）修了。D.C.I.A.シンガン大学大学院を経て、南カリフォルニア大学大学院博士課程修了。米国家族関係研究所・結婚カウンセラー養成課程修了。スウェーデン国ウプサラ大学・ウメオ大学での結婚・離婚問題研究を経て帰国。龍谷大学教授、同短期大学部長、大学評議員、社会部長、法人理事を歴任。現在、龍谷大学名誉教授、四天王寺国際仏教大学教授。大阪教区讃良組善宗寺住職。
著書に『海野幸徳集』（鳳書院）、『仏教社会福祉論考』（法蔵館）、『社会福祉学の基礎』、『社会福祉対象論』（さんえい出版）など。

1. 戦後の本願寺派教団と本派社会福祉推進協議会

現在、皆さまも既にご周知のように、本派社会福祉推進協議会では、“みんなの福祉をあつめる運動”を展開していますが、ビハラ活動のような課題達成目標が明らかなものではなく、地域の組織化や福祉の組織化といった恒常的体系化を目指す社推協の活動はなかなか全国的な規模の活動展開にまで至っていません。それには、西高東低型で伝統的農村型の教団の特性、宗会の体質や各種委員会のあり方の問題、活動政策策定の過程や事業展開の実践過程、ないし教区組織等、いくつかの要因を指摘することができますが、むしろ

皆さま方のすぐれた分析力と洞察力に期待致すことにたく存じます。

戦後の本願寺派教団を総点検するという時期があり、組織、宗政・財政、教化等、あらゆる角度から根本的に検討するという中で、社会事業・社会福祉の面については欠落していたということで、当時の社会部長が私の研究室においてになったことがございます。このことが契機となり、社会福祉研究協議会



(委員は本派関係大学の仏教学、真宗学、社会学、教育学、史学、社会福祉学分野と宗務当局から選出)が発足し、ほぼ毎月のように開催される研究協議会は、社会福祉プロパーでかつ歴史や分野論や社会事業方法論に強い有名教授を参考人としてお招きし、意見発表、意見交換、情報聴取等による研究協議であり、有意義でありました。そして、一年後に、本願寺派教団は「他力信仰の本義の開顕に努め、人類永遠の福祉に貢献する」(宗法総則第1章) 教団であること、同時に社会福祉実践の基本理念が「念仏に生きる者がおのずから他力回向の信心に基づき社会的実践活動に参画したり、社会奉仕活動の推進に努めることはむしろ当然のことである」ことを確認し、『浄土真宗社会福祉基本要項』を作成したのです。そして、他人のいたみを自己のいたみとし、他人のよろこびを自己のよろこびとして受容していく人格であってこそ、人間が人間としての共感と信頼の上に成立する共に生き、共に育ち(共育)、共に歩く(共歩)御同朋御同行の報恩行(実践)が展開するわけです。人間と社会に正しい認識の眼を開き、現実を直視すると共に、共に生きる仲間たちを発見し、共に育ち、共に喜ぶ身に導かれて

いる自己を発見することができるかという問題であります。信前・信後の生活は、如來の本願を聞き開く現実にこそ存在するものであり、仏縁に恵まれてある現実のいのちの輝きに目覚める生き方と言えましょう。“みんなの福祉をあつめる運動”は、共に生き、共に育つ仲間(御同朋御同行)の発見と絆のひろがりをつくることであります。

「本派社会福祉推進協議会」は、現代社会の構造的欠陥と矛盾から生ずる必然的所産としての技術革新、職住分離、過疎・過密、少産少死、家族解体、階層移動、コミュニティの再編成等々の歴史的・社会的諸問題に対応する社会福祉施策や援助・支援対策を策定し、現实的・具体的な実践活動につなげる使命と課題を担わされているわけです。宗教法人が公益法人である限り、単なる日常的法務活動にとどまらず、開かれた同朋教団としての社会的責務を果たす役割についての真剣な取り組みが期待されているわけです。

2. 伝統的な講組織から学ぶもの

伝統的なムラ社会において凝集性が強く、生産手段がツチにあった時代では、イエの継承が目的でありました。また、この時代は地域のつながりが支えとなっていたのです。労

働と消費の場を共にし、イエ共同体（血縁）・ムラ共同体（地縁）による生活の共同を基盤として喜怒哀楽をもに分ち合って生きる“たのしいわが家”（万葉語では手伸しいわが家という）でありました。しかも、先祖と共生することで祖法遵守と祖先尊崇を中心とする生活の共同が存続したことで、慰め合い、励まし合い、いたわり合いや助け合いの精神が強く、結いの文化を育ててまいりました。わたしたちは、現在すでに衰退しつつある講組織から学ぶことが多いと思います。講組織の特徴を整理すると、ほぼつぎのようにまとめられると思います。

- イ、全国レベルで展開した強固な門徒の自立と連帯を構築しました。
- ロ、共生・共感・共育を志向する同朋精神の尊重を地域間の交流と連帯と自治に拡大しました。
- ハ、地域福祉活動におけるボランティアズムを推進しました。
- ニ、共に生きる住みよい地域、交流と連帯によるセーフティゾーンを構築しました。
- ホ、自助・互助・公助の力動的人間関係を認め合う自治組織が形成されました。

へ、語らいの場を提供し、接触交渉をくりかえす寄合を尊重した念仏者コミュニティを実現させました。

このような講組織によって発展した本願寺教団は、住民の、住民による、住民のための社会福祉活動を推進する拠点として、地域・地方寺院の存在を認め、社会福祉活動機関や社会福祉施設への助成や補助をするほどの意欲を示すことがすぐれて重要なことではないでしょうか。このような発想が教団にないということ自体にこそ、教団の形態化・伝統固執化の歪みが露呈化していることを指摘したいと思います。

3. 近代社会化と仏教社会福祉の可能性

このへんで、日本近代社会における社会福祉の歴史的系譜について概説しておきましょう。まず明治時代ですが、キリスト教の進出がめざましく、内外雑居の時代ともいわれました。明治7年には廃仏毀釈もあり仏教教団の再編成化がせまられる中で、自宗擁護・外教排除による仏教の社会的有用性を顕示して、明治34（一九〇一）年には大日本仏教慈善会財団を結成し、全国レベルで大々的に募金活動を展開すると共に、児童養育・保育、貧民救済、医療保護、職業斡旋等多角的な事業を

運営したのです。社会問題もだんだん深刻化していく中で、政府もやっとの思いで明治44（一九一一年）年に内務省第1回細民調査を実施したり、恩賜財団の済世会を設立したりしました。仏教福祉の可能性は渡辺海旭（一八七二～一九三三）による浄土宗労働共済会の設立を実現化させ、底辺労働者の「防貧」施設のさがけになったことで明らかになりました。続いて、大正8（一九一九）年には長谷川良信（一八九〇～一九六六）によってマハナ学園を誕生させ、寺院社会事業と地域福祉のさがけになり、矢吹慶輝（一八七九～一九三九）が近代社会事業の精神として無我や利他と報恩による連帯共同観を説きました。さらに椎尾辨匡（一八七六～一九七一）が大乗精神による共生会の創設と共生運動の組織化を推進し、大正10（一九二一）年には、大阪市・中津に本派僧侶の佐伯祐正（一八九六～一九四五）が光徳寺善隣館を設立して近代仏教福祉の、とりわけ寺院セツルメントのさがけとなりました。また地方でも、大正17（一九二八）年、岡山県は独自で済世顧問制度を設立しました。『慈善』という雑誌も『社会と救済』に改題しました。翌年には米騒動の混乱の中、大阪府で方面委員制度が発

足しました。そして、大正12(一九二三)年に関東大震災が発生した結果、社会問題が一挙に沸騰し貧困問題と社会事業が大きくクロウズアップされ、慈善から近代社会事業への分水嶺ともなったのです。

4. 現代仏教社会福祉の可能性

激しく揺れ動く現代社会では、登校拒否、不登校、校内暴力、教室崩壊、児童虐待、いじめ、性的虐待、家庭崩壊、環境破壊、生活破壊といった社会的問題を避けて通れなくなりました。とりわけ、引きこもり現象やゲーム症候群、さらに親指IT文化や凶悪犯罪の氾濫は、どうしようもない社会現象としか表現できないほどです。しかし、一方では、社会福祉施策として「健やかな子どもを生み育てる環境づくり」や「子育て支援の環境づくり」を展開したり、「住みよい福祉のまちづくり」や「健康福祉のまちづくり」を推進したりしています。

これらの歴史的・社会的諸問題について正しく認識し、情報交換を密にしながら、現実直視と転換開悟やノーマライゼーションの理念にそって、仏教社会福祉の可能性を追究することが、期待されている時期です。公私分離の原則のもとで、民間社会福祉としての役

割をどのように担い、どのように社会的使命として遂行していくのかを自分の問題として取り組むところに、仏教社会福祉の可能性を見出すことができます。どのようにすればいいのかを問うまえに、何ができるかを問うことが大切です。

最後に、仏教社会福祉の視点から考えねばならない重要な実践課題について列挙して終わりたいと思います。

- イ. 家庭の食事(同餐)と家庭の団欒と語り(コミュニケーション)
- ロ. 共生・共育・共感の論理と自立支援ならびに権利擁護
- ハ. 社会的孤立や引きこもり現象とノーマライゼーション
- ニ. 余生・本生・永生といのちの輝き(ビハーク活動)
- ホ. 自殺、介護殺人、虐待、孤独死、中絶精神障害等
- ヘ. 官民から公民へ、権力主導型から住民自治型へ、公私分離主義から公私協調主義へ
- ト. 民間社会福祉活動の公的福祉とのかかわりと位置づけ
- チ. 仏教社会福祉の原点は地域福祉であり、

地域福祉組織化が課題である

リ. 児童養護施設や老人ホーム等の社会福祉施設を経営する施設福祉サービスだけでなく、託老所やデイサービス、あるいはふれあい街かどセンターのような在宅福祉サービスの提供

ヌ. 地域に開かれた寺院であり、公益法人としての寺院であることの認識

云い足りないことはたくさんあると思いますが、今後もし許されるならば、皆さんと一緒に“宗政と社会福祉の問題を考えよう会”でもつくることで、定期的、持続的に情報交換をしていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

長い間、ご熱心にご静聴頂きましてありがとうございました。

合掌

第1回研修会日程

期 日	時 間	行 事 内 容	会 場
8月2日 (木)	13:00	受 付 ・ 山口別院1階ロビー	山口別院
	14:00	開 会 式 ・ 勤 行「讃仏偈」 調声：井上隆純会員 ・ 挨拶（藤谷代表世話人・山口別院輪番・島田明会員）	
	14:30	講 演 ・ 講 題：ドキュメンタリーで綴る戦後50年 ・ 講 師：磯野恭子（山口放送顧問）	
	16:00	質疑応答	
	16:30	事務連絡	
	17:00	<移動>（湯田温泉へ）	バス移動
	18:30	懇 親 会	ホテル松政
	20:00	<宿泊>	
8月3日 (金)	7:30	朝 食	
	8:30	<移動>（山口別院へ）	バス移動
	9:00	お 朝 事 ・ 勤 行「重誓偈」 調声：片山隆昭会員 ・ 法 話（竺川紹隆世話人） ・ 山口別院沿革について 別院職員より説明	山口別院
	9:30	<移動>（きらら博会場へ）	バス移動
	9:50	山口きらら博視察	きらら博会場
	14:10	<移動>（小郡駅へ）	バス移動
	14:30	小郡駅解散（萩史跡見学申込者は引き続き萩へ移動）	

第1回研修会レポート

第2ブロック（山口教区）

8月2日（木）から8月3日（水）まで1泊2日の日程で、第2ブロック（山口教区）に於いて実施いたしました。
参加者は会員、非会員（寺族・門徒）あわせて41名。内容は、山口別院参拝、山口放送顧問磯野恭子氏による記念講演、山口きらら博の視察などをいたしました。

第1回研修会記念講演

講師略歴

磯野 恭子（いその・きょうこ）

ドキュメンタリーで綴る 戦後五十年

山口放送顧問

磯野 恭子



ただ今、ご

紹介にあずかりました磯野でございます。

大変高い所からお話をさせていただくのは恐縮でございますすけれども、

全国からこうしてこの山口へお集まりいただきまして、本当によいこの山口県へというわけでございます。特に山口市はですね、盆地でございますので、平均1度から2度くらい、大変暑いところでございます。しかし、さきほど何回かでておりましたように、きさら博が開かれておりまして、全国からこの山口の地をめざしてお集まりいただく方が

多いと思います。

8月という、いつも私はこの夏の暑さというか、酷暑のみぎりが大変好きでございます。暑いですが、この燃えるような夾竹桃の花と、それから沿道に植えられているカンナの花が、息絶え絶えに、しかし、赤色を見事に空に向けさせる、この、あの甦る、萎えながらも甦っていく夏、というのが大変好きでございます。8月は私どもの時代でやはり一番大きかったのは、日本が戦争に敗れたという、8月の15日でございます。それよりちょっと前は原爆が落ちました。8月6日に廃虚になっていったヒロシマの跡が、この敗けていった8月というのがなんとなく死者への弔いといひますか、祈祷の月ではなからうか、遥かに昔を忍びながらこれからの行く末を考えてみると、この8月というのは1年の中で

昭和十（一九三五年）、広島県生まれ。広島大学卒業後、山口放送に入社。アナウンサー、ラジオプロデューサー、ディレクター、常務取締役を経て現在、山口放送顧問、山口県家庭教育充実事業企画推進委員、山口県人事委員、岩国教育委員、岩国市基地内大学専門委員。昭和五十七（一九八〇）年、女性ジャーナリスト賞受賞。昭和五十七（一九八二）年、ソロブチミスト婦人援助賞、山口県選賞受賞。平成十二（二〇〇〇）年、紫綬褒章受賞。数々のドキュメンタリーを制作。主な作品に『聞こえるよ、母さんの声がー原爆の子・百合子ー』（文化庁芸術祭大賞、『大地は知っているー中国へ残された婦人たちー』（文化庁芸術祭作品賞）など。著書に『聞こえるよ母さんの声がー原爆の子・百合子ー』（労働教育センター）、『愛と死の時間ーある回天搭乗員のメモからー』（青春出版社）、『ドキュメントの現場』（大阪書籍）など。

暑いけれども、そういう意味で立ち止まって、それから鎮魂に意をきたしながら、また明日から生きて行こうという、1年で一番意義のある月ではなからうか。そして仏教で言えばお盆ということで、死者が甦ってくると言うふうなこともございます。それで私も広島生まれでございます。安芸門徒と言われるくらいに、本当に浄土真宗の教えを各家庭が当たり前のように入受けて、たまたまこの別院に入りまして応接間に入りますと、新潟の佐渡なんです。雪の中、雨合羽に聖人様がお弟子の援助で、寒さの中を語らっしゃる姿を見ると、ああいうのをやはりお寺に行くと必ずそういうものがかかっておりましたし、やはり昭和の20年よりちょっと前なんです。本当に親戚が次々と死んでいったものですから大変お寺にご縁がございまして、いつも子

供心にも人間の命なんて儂いものなんだと、そこで仏教の真髓といえますか、その人間の生というのは朝紅顔の美少年であっても夕方になるとその眼（まなこ）を閉じると死が訪れていると。人間というのは本当に愚かなもので、いつまでもその命はあると思っているけれども、ある日突然、白骨になっていくと言うふうな無常。これは小さい頃からありましたが、そしてそういう中で、私も母を失ったり、祖父を失ったり、弟を失ったりしながら、あの戦後を生きてまいりましたから死に対する覚悟みたいなものがありました。自分の命が本当に生きてるといことは奇跡に近いくらいに大変な事、死というのはすぐ身近にありながら、誰もそれに気付いていないと。しかし、鎮魂に明け暮れる、あるいはお盆に灯籠を立てる、あるいは墓参りをするということによって、また新たな出発ができるんだというふうなことは、小さい頃から血となつて肉となつておりましたので、久しぶりにこういう別院に参りました、墨染めの衣に身を纏つて袈裟をやつてらっしゃる姿を見ると、本当に遠い昔のあの懐かしい風景に出会ったような感じがいたしました。今日お呼びいただいたことが、ある意味ではすごく自分にとって、いいお出逢いになったような気がしております。お話もそういうところで私のドキュメンタリー人生ということでございますけれども、そのドキュメンタリーというのは、そ

の時代時代を生きながら、その時代を私が切り取りながら、人々にメッセージを送ることでございます。だから、私の人生哲学みたいなものがきつとその作品の中にテーマとして流れているのではないかと思います。今日それぞれ役員さんがここでメッセージを送られました。私の言いたい事もそのメッセージにありましたことをちょっと丁寧に整理をしながらお話をする事になろうかと思ひます。「ドキュメンタリーで綴る戦後の50年」ということで、ここにレジュメを書いていただきますので、それに従つてお話を進めさせていただきますたいと思ひます。

私は講習会ということでございますので、お若い方が、いわゆる戦争を知らない方が多いのかなと思ひまして、冒頭、あなたは戦争を知っていますかという投げかけにいたしました。けれども、もちろん皆様方はですね、太平洋戦争はよくよくご存知でございますし、うし、あるいはそれより前の中日戦争であるとか、あるいは満州事変とかそういうふうなものをお聞きおよびなので、これをあえて問題提起にいたしましたのは、子供たちというのは、戦争といつても、本当に日本がアメリカと戦争をしたということを知りません。原爆を受けたこと、それからそこで日本が非常に悔しい思いをしながら焼きつくされて、それから多くの若い人の命を失つて、何も無くなつて戦後再建し、復興していったということも

知りません。だから戦争のお話をする、それは自分達とは関係のない遠い世界のことだと思われるのですが、私どもは、やはり、子供たちに日本の歴史というものを、事実をきっちり伝えるというふうなことを、いつの間にか経済的に豊かになって行くにつれて忘れてしまったのではないかと。その忘れてしまった事がただ戦争を教えないということではなくて、あらゆる物の見方で持たなければならぬ人間として、基本的に持たなければならぬ、例えば生きてこられた方々、目上の人々に対する敬意を払うとか、先生に対する言葉遣いであるとか、両親に対する感謝の心とか、あるいは弱い人々に何かをする、自分の人生をどういう風に人様に捧げるかという一番大事な部分を、戦争というこの浮き沈みを教えないと同じように、そういう日常的な大切な部分を教えてこなかった。そのことが、経済が豊かになり、物が溢れると同時に様々な広範な私のテーマに重なつて参ります。カネ、カネ、カネですべてを解決するというような時代、それから何でも捨てていって省みないことですね。あらゆるものが権威をなくしていつて人間そのものも落ちていったといましようか、人間の尊厳も、言葉も生き方も皆崩壊してしまつた。そういう中に17歳という非常に問題を起した一連の事件がありますし、最近では12歳という女の子が道路に捨てられて死んでしまつたというふうな事件を生

んできたんではないだろうか。その事件を私どもはもう一回、8月という月に、戦争の事、人々が失っていった物、あの死者が私どもに託したもの、そういったものを私どもはもう一度心静かに振り返りながら、そのことを考えてみたいと思うんです。

太平洋戦争というのは、本当に昨日でございましたか、「あの時歴史が動いた」というNHKの番組でポツダム宣言をやっております。もしトルーマンとスターリンがヤルタ協定で、ああいう事実を知っていたら、知っていたらというのは、我々とはにかく8月15日で終戦なんですけれども、すでに3月でロシアは日本を占領したいと思ってたし、戦争をしたいと思ってたし、それからトルーマンはロシア抜きで戦争を終結したいと思っていた。その事を日本の支配者がもっと情報を分析して確かな判断ができれば、原爆もそれから中国の残留婦人も残留孤児も生まれなかっただろうと思います。ただ日本は一縷の望みを日ソ不可侵条約にかけながら、日本は降伏しないというふうなことで8月までもってきただ。そのために多くの犠牲者を出したということを経史上で知れば、私は太平洋戦争というふうなもの、もっといろんなものが見えてくるのではなからうかと思えます。太平洋戦争というのは、要するにアメリカを始め、ヨーロッパの各国と戦をするんですけれども、それより前にやはり第一次世界大戦1914

年、それでドイツが世界に向けて宣戦布告をして、日本も第一次世界大戦では勝つんですね。青島をもらうんですね。日本が戦勝国となった時に、資本主義社会というのが初めて戦争の賠償金と共に日本に入ってくるんです。大正の時代というのは、わずかに大正ロマンとか非常に自由な雰囲気が入ってきたというのは、そういう第一次世界大戦のおかげで日本はそれほど傷つかないままに勝者となって、あのヨーロッパの自由とか、あるいは権利とか初めて入ってきました。しかし、長続きしなかったのは、バブルに追われて資本主義社会というふうなものがこの仏教の教えと同じように永遠に豊かさが続くと思って、いろんな事にお金を使うとやがて破綻を生じる。やがて昭和恐慌いってしまうのです。銀行が倒壊する、人々が職を失う、日本の領土では狭いから生きて行けない。海外へ向けて資源を求めていく。そして、諸外国、先進国、第一次世界大戦に勝ったアメリカとかイギリスとというのは植民地をたくさん持っていますから、いろんな物を売るマーケットもあるし、資源もお金もどんどん世界の海を制覇できるけど日本には植民地がない。だから列強の帝国主義のように、日本にも植民地があったらいいな、というふうなことで満州事変にも発展していく。世の中不景気になって今までと同じ様な資本主義社会が維持できなくなると、やがてファシズムといいますか、国を上から淘汰



りに何もかも自分達が命令を下していくという軍国主義が華やかになっていくわけです。しばらくして中国の大陸に向かって宣戦布告をして中日戦争

汰していろんな事を切りつめていって、それまで開かれていた国会あたりも軍事政権になっていって、国会議員も締め出されていく。民主主義がある意味では殺されていく時代が昭和の初めなのです。そして不況、人口は多い、食べていけない、農村の若者らをどうやって食べさせていくか、当時ロシアはやはりその頃満州国が欲しかったわけですから、日本は負けじと満州国を自分達の手中に収めた。そこに大陸政策として、人々を開拓農民として自立させて五族共和、いろんな中国人も満州国人も朝鮮人も日本人も一緒になって王国を作ろうというふうなことが展開されるわけです。日本でもそれに抵抗する労働運動もありました。あるいは自由民権運動もありました。それから女性の選挙権を求めたりする運動など昭和の初めには制圧をされて、昭和11年の頃は軍事政権が統帥権といって、天皇のかわ

が始まり、やがて昭和14年にノモンハン事件というロシアとの国境をめぐる戦争していくわけですが、日本は昭和の初めから太平洋戦争までは、本当に戦争に次ぐ戦争で息もきらずにお国が暴走していく時代だったわけですね。

その太平洋戦争にいくまで日本は、あと私が見て通していろいろな戦争の問題を取材した時に、やはり日本の戦争に対する考え方と、アメリカの戦争に対する考え方がまったく違うなと思いました。マンハッタン計画というのは、いわゆる原爆を作るための計画なのです。日本はその頃、マンハッタン計画をアメリカが考える頃は、物資も無く、戦いに行く飛行機もそれから戦艦も沈められて何も無い時に海軍の特攻隊を考え出します。敵艦にぶつかって、もう二度と帰れないという作戦をするのです。アメリカのマンハッタン計画というのは実にアメリカ的だなと思うんですけれども、予算は24億ドルといいますが、約880億円ぐらいの予算を計上するのです。そして科学者、物理学者をアメリカ全土、それからヨーロッパから36人集めるのです。彼らの1月の月給が約100万くらいですから、すごい給料になるわけです。3つの大学でそれぞれ競争させながら原爆を開発させるのです。非常に速攻といえますか、これをやろうと思いますと実際に日本みたいに稟議をあげて物を決めるのではなくて、3つの大学での組織を作って、コロンビア大学、カリフォルニア大

学、それからボストン大学というふうにそれぞれ予算を決めてスタッフと、科学者をグループで10何人かずつ配置して、それからそれに付ける工学的な博士とか民間人とか、そういうふうなものを一挙にシステム化して作っていく。大学の学者が考案したことを技術的に組み立てていって、それらを後押しするのに、大きな街を人工的に作っていく。わずか1年ちょっとの間にオークリッジとかハンフォードとか、まったく荒野に何も無い所に街を作って、鉄道を64キロひいたり、あるいは道を200キロひいたりしながら実に見事に作る。今、宅地を造成して建て売り住宅を作るとあつという間に家ができてしまうような感じで街を作って原爆の街にしてしまうわけですね。そして、そこに5万とか3万の労働者を集めて手でやったり、足でやったりするのではなくて、遠隔操作で機械を使って原子核を破壊するわけですから、人体に影響を及ぼすからそういうふうには遠くから加工していくシステムを作る。それが1年半で原爆を3つ作ってしまうのです。それぞれウランから引っ張り出して原子核を抜き出して、すごい膨大なエネルギー、あるいはプルトニウムから加工して、プルトニウムに強い風を与えたり水を与えたりしてプルトニウムから原子核を引き出すことによってエネルギーを発信するというふうなことを3つのパーティーで競争させながら3つの原爆を作っていくのです。それが原爆

を作った、昨日もヤルタ会談の時に出てきたけれども、7月の16日に最初の1発を実験するのです。そうしますと、実に成功するのです。ネバタの砂漠の中で原子爆弾を破裂させる。あとの2つをいつ使うかということになって、ヨーロッパの学者達は、もう日本もドイツも敗けているのだからそれを落とす必要はない。人体に影響を及ぼすというのがわかってるのであれば原爆を投じるなどというのです。署名運動までするのですけれども、結局軍部あたりが対ソビエトに対して原爆を使うことを、日本に落とすことによってロシアに打撃を与える目的で、やはり2つの原子爆弾は使われてしまう。それがマンハッタン計画というアメリカらしい兵器の開発プロセスです。日本ではどういうふうになったかといいますが、昭和16年の12月8日にハワイの真珠湾攻撃でアメリカの連合艦隊をほとんど破壊したのです。けれどもその時にアメリカはもう飛行機の時代だと方向転換する。巨艦制度はもう時代遅れだと。では飛行機をどういうふうに関係すれば日本はくたばるかというところで、それから、B29とかB24とか飛行機を作ったのです。だから民間の企業を全部軍事工場に変えていって、まさに日本は軍艦で攻めていって日露戦争に勝ったのだけれども、やがてアメリカの飛行機時代に負けてあらゆる連合艦隊が翌年の昭和17年、ミッドウェー海戦で全滅をした。やがてフィ

リピン沖海戦で残った艦船で戦をするのですけれど、向こうの膨大な戦力には、太刀打ちできない。そして海軍はなくなっていく、飛行機もなくなっていく、最後は神風特別攻撃隊ということで、飛行機で体当たりをしていく。それもなくなってきた、人間魚雷回天というのが昭和19年の9月1日に開発されるのです。それも魚雷が使いみちなくなっている、大艦巨砲主義時代を通りこして、魚雷がいなくなったのが倉庫に眠っている。それを人が乗れるようにして、自分で運転して敵艦にぶつか。敵が向こうが走るわけですから何ノットの速度で何度の方角できたら、自分はこれから200メートル離れた所から敵艦にぶつかればそれが攻撃できるかという、実にみみっちいと言いますか、虫眼鏡で戦をするような回天戦というのは開発したのが、昭和19年の9月です。回天というのはですから天を巡らすというこらしいのですが、負け戦を勝ち戦に変えるから、どうぞ、そういう兵器に乗る人を募集するというふうな事で若い人達がぞくぞくと、徳山の沖に大津島という半農半漁の島があるので、そこでも、そこで人間魚雷回天を開発して、それも、要らなくなった魚雷を改造して人が乗れるようにして、それをわずか半年ぐらい訓練をして敵艦にぶつかっていくという回天戦を展開していったのです。20年の8月15日までに約145人の人が回天隊に乗って出撃したけれどもその成果はあんまり

なかった。どれくらいの成果があったかといったら、第1回の出撃の時は相手が港に停泊していましたから、そこで5隻のアメリカの艦船がやられたということがありますけれども、やがて向こうもレーダーで防衛をして回天が突撃する時には全部事前に追い払ってしまつて回天隊で出撃したけれどもあまり成果は上がらなくなりました。片方がマンハッタン計画で膨大なお金と予算と時間をかけて3つのパーティーに別れて戦略を展開していったのと比べ、日本は自分の命と引き換えに回天戦を戦わざるを得なかったという、この勝敗はとくについているわけです。こういう戦をしながら特攻作戦を展開していったのです。最後は国民一人一人が最後まで戦い、絶対日本は負けることを信じてない。そういうふうにしてボロボロになっていつて8月が原爆を受けて最後はもう戦争に負けざるを得なかったのですけれども、原爆を受けた頃は小学校6年生だったので島にいたんですね、江田島の海軍兵学校の島にいて、兵学校の島であるけれども、兵学校の人達はなんでグラマンの攻撃を受けながらも反撃することなく終戦を迎えるのだらうと思った。やがて広島からボロボロの様になって被災者が島へ帰ってくる。生きて島へ帰ってきて9月、10月になると髪の毛が抜け、斑点が出てついに死んでいくという。二十世紀で初めての原子爆弾というふうなものがすぐ身近な所で爆発をして

人が死んでいく、しかも学生達が、戦を戦う力の無い人達が死んでいく。広島の子供達は両親を失ったり、家を失ったりした。翌年、私が広島島の旧制の女学校に入るので、学校もみんな焼けているから教室もちゃんとしたものではないのですけれども、バラック建ての教室の間に真っ赤な夾竹桃が咲くんですね。74年間は草木も茂らないと言われた広島町の夾竹桃の花が咲いた。そして、それがすごい子供心にも希望でございました。放射能で焼けただれた広島町の街に花が咲くというふうな。廃虚になった中でこうして新しく生きるという、親を失ったり家を失ったりした友だちの胸の中にも生きようという思いもあったのではないかと思います。私はそういう海軍兵学校の島、それから原爆というふうなものを非常に身近に感じておりましたから、やがて、このドキュメンタリーは後で見えていただきますけれども「原爆の子百合子」といってお母さんのお腹の中にいた時に被爆をした子供が知恵が3才ぐらいで止まってしまうんですね。お母さんといないと何もできない、母と娘が戦後30何年間生きてきた事、人間魚雷回天の死者達の遺言というのは回天で亡くなった死者、特攻隊を描くのは私の手に負えないなと思つたです。やはり女性問題というのはわりによく分かるのですけれども、海軍という、帝国海軍という大きな力、その中で彼らが何を思つて死んでいったかという手がかりがな



かなかつかめなくて困りました。その「人間魚雷回天」を作ったのは昭和61年ですけども、それまでずっと手を付けなかったのですね。でも、この江田島の海軍の人が開発した人間魚雷回天搭乗員の思いを、いまのうちに伝えとかなければこれを知った人はいなくなるのではないかという思いで「死者達の遺言」という形でドキュメンタリーを作りました。いずれも50分くらいの長いものを短くしましたので、お話もとんでいると思いますけれども、彼らが私達に、戦後の私達に言いたかったこと、自分は死んでいくけれども私達に伝えたいことがあったこと。それから百合子さんの場合は、

自分は物が言えない、原爆で傷ついた頭脳と身体、母親と別れざるを得ない運命を、私は原爆の子に変わって、戦争とは何かということとを伝えたいのです。「百合子」は昭和54年の作品でございます。「回天」はカネ、カネ、カネというふうな時代で昭和61年、世の中が戦争でもない、あらゆる物がお金で解決をする、日本がものすごく高度経済成長で豊かになった時代に、これでいいのかというふうな思いで作ったのが「人間魚雷回天」でございます。ではちょうど時間になりましたのでちょっと30分ほど見ていただきたいと思います。

大変長い時間ありがとうございました。和田稔っていうのは学徒出陣で出て行った兵士です。どうして和田稔を選ぼうと思ったのかは回天の記念館が落成しまして、いろんな手記だとか遺品を一同に集めないと戦後の核家族の中で、そういう要らないものはみんな捨てられてしまうから、結局死者たちの物が何も残らない。しかも、妻や子供のいない若い独身の士官たちですから、お父さん、お母さんが亡くなったら、そういうものも散逸してしまうだろう、ということ、徳山の回天記念館に集めました。全国から遺品が集まった時に落成式があり、会場に5人の遺言をカセットテープで流していたのです。で、いろいろ前半がありまして、一番最後に和田稔というのを覚えました。「私は今、青春の真

昼前を私の国に捧げる」という軍人らしからぬ、何か人の心を引きつけるような士官が和田稔だったんですね。で、これが回天の搭乗をして、もちろん亡くなられた方なんですけど、江田島の出身かなと思って、和田稔の名前を覚えていました。いつか必ず和田稔を探り当てようと思ったのが昭和43年なんです。それから長年の月日が流れまして、もう和田稔を探らなきゃと思ったのが昭和59年です。実はお医者さんの息子で学徒兵だったわけですね。だから、彼は自分の命に代えて遺言を書き続けたわけです、ノートにですね。半纏の中にはそのノートを縫い込めて送ったり、あるいは、弁当箱の下に、面会の時に自分のノートを忍ばせて、実家に送りつづけたんですね。彼にとっては、もう、もちろん日本が負けることも分かっているし、自分が回天に志願することの無為な、無駄なことも分かっているけれども、しかし、自分が祖国のためにですね、せめて貢献できるとしたら、平和の歌をですね捧げてくれ。日本は敗けるであろうけれども、平和を歌い続けてくれよ、というふうな思いを妹さんに託したんだろうと思うんですね。頌歌であって欲しいというのは、万葉なんかによく出るんですけど、頌歌とは平和の歌というふうな意味なんですね。だから、戦艦にぶつかって死ぬことが「ますらおぶり」ではなくて、平和のために自分はいしずえになるというふうな思いです。彼は詩も書くし、

バイオリンも弾くような青年ですから、体も大きくないし、強くもないんですけれども、一生懸命死に向かって修練（収斂）していった。そして、遺言も実に淡々と自分のご両親にですね、書いてらっしゃる。その遺言をですね、やはり、我々が彼の遺言をですね、戦後の日本の平和が頌歌として花開くようにという思いでドキュメンタリーにしたわけです。で、もうすでに、そのときはお父さんもお母さんもういらっしゃいませんでしたけれども、お父さんは彼の残した5冊の日記帳をですね、お医者さんで、往診から帰ったら必ず応接間に行っていましたね、ノートに書き写していたそうです。そのときには、お母さんは絶対にその部屋に入らない。自分の分身としてですね、そのノートを父親は一言一言書くことによって、彼の戦争に向かっていく、死に向かって行く覚悟のほどを追体験しようと思われたし、お母様はですね、その期間、一歩も書斎には入らなかったというのを、若菜さんがおっしゃっています。父が子を思うこと、母が子供を思うこと、それから、兄弟が兄を思うことはみんな違うんだなと思いました。それがやはり、日本の文化だろうと思うんですね。結局、彼の死は敵艦にぶつかって死んだんじゃないくて、艇がですね、事故を起こして海底に沈んだまま浮ばなかったんですね。艇の中にいながら出して出撃する前に死んでいった。それより先、沖縄に出て、帰ってきたんです。それが

敵艦にぶつかることなく帰ってきたもんですから、また、8月ですね、何日かに出るのになつて、猛練習していたときに、艇がですね、故障のために二度と浮上しなかったというから、殉職なんですね。戦後8月15日が過ぎてですね、20何日かに、「和田稔、公死ス」公の死ですね、「公死ス」っていう一通の軍事郵便が来たままで和田は殉職をしたっていうことを家族に知らされるんです。で、お父さんは残された日記帳をですね、リライトしていった。で、お母さんはですね、それを遠くから見守っていた。で、妹さんは自分の息子はボタン一つでも押すことはならんと、不戦の誓いを私どもに語ってくれました。あの貧しい時代ですね、しかも、ものない時代に、和田一家の文化というのはですね、きらびやかな文化といえますか、しっかりとしたもの考え方を持っていたらだろうと思うんですね。それに比べ、今の子供たちを虐待して殺す母親、その親の生き様とか、あるいは、17歳ですね、人をあやめて人を殺すというふうな文化風土はどうでしょう。きわめて豊かな国の貧しい国民ではないかなと私は思います。で、戦後、日本が追い求めているお金至上主義の社会の中で、何も学ばない、何も尊敬しない、富める国の貧しい生き方っていうのが、今の17歳や12歳の子供たちの中に横溢している。IT時代になりますと、それがもっと加速いたしましてですね、

あの、10年前のことも、5年前のことも、今は昔、というですね、非常に速いスピードで世の中がですね、移ってきました。そうすると、50年前の戦争の、あるいは、死者たちの遺言もですね、今の17歳や12歳にとってはですね、自分たちには関係のないことなんです。それは勝手に死んでいったんだろうと。我々には関係のないことで、かつての若者に思いを馳せるどころか、自分たちが今豊かになるために盗難事件を起こしても平気、茶髪に髪を染めて、短いスカートにルーズソックスをはいて、ケータイで電話をしながら歩いている子供たちを見るとぞっとする。大人に對するエチケツも、あるいは、自分がどういうふうに思われるかということも、まったく無関係にですね、そこにあると思うと我々は戦後50年、何を彼女ら、あるいは、彼らにですね、与えてきたのかなあと。あの戦争時代のですね、自分の命と引き換えに国を守るという人々と比べてですね、今の子は自立もしていないし、無邪気です。快楽に励んでいる、その子たちを見ると、我々はバブルの崩壊後17歳の空しさといえますか、あんなさを見るような思いなんです。日本が戦後、昭和52年くらいから世の中がずいぶん変わっていったことをみなさん、ご記憶だろうと思うんです。せめて、昭和48年に私が「原爆の子」を作ったくらいまでは、まだ日本にもいんな頑張っている人たちがいたと思うんで

すけど、50年を過ぎてですね、テレビも大いに変わったんです。「おもしろくなければテレビでない」と、「いいじゃないの幸せならば」という歌があつたころ流行っていたんです。その頃、共通第一次試験というの導入された。それで、みんな背番号をつけてですね、成績のいい子はいいところに行くし、そうでなかった子はおちこぼれになったりしてですね、学校も荒れていったんですね。それから、世の中も日本がだんだんバブルに向かっていきますから、世界一金持ち国になってですね、金で出来ないことは何にもない。アメリカのマンハッタンのビルを買ったり、世界の不動産を買いたたり、ホテルを買ったり作ったりですね、で、考えてみたら、それみんな借金ですね、土地を買ったり、ビルを買ったりしてたんですね、その麻痺をしていく時代というのが、昭和60年代から平成ですね、バブルがはじけるまで。その間、日本は完全に変わっていったと思います。で、学校も荒れるにまかしてですね、ツッパリの子供たちはいるけれども、それを命をかけて直そうという先生もいなくなった。ただ、情報化社会が加速されていく中で、人々は砂粒のように浮遊していく。人間というよりも情報化社会の一部の部分とか、そういう形で未来が見えなくなっていたのがバブル絶頂期からバブルがはじけるあたりだろうと思うんですね。はじけた後に、じゃあ、あの一枚岩

だった官庁ですね、大蔵省、外務省、通産省がですね、あの、ボロが出てくるわけですね。堕ちた偶像といいますか、あの人たちは大丈夫だろうと思つた人たちが実にちやちな罪を犯している。今まで大家族できっちりしたものがほころび始めて、都会へ都会へと出ていって、地域とのコミュニケーションもないし、「隣は何する人ぞ」ということですね、結局、新旧の価値が、こう新しい人たちによってですね、混沌の時代を迎える。中学生、小学生もそういう親たちに育てられて、悲しいまでに失つたものの大きい時代です。私はここ20年だろうと思うんです。せめて、初めの30年は頑張つて、世の中は変わったと。戦前は、何も出来なかったけど戦後はいろんな可能性があつて、力があればのし上がっていくというのが戦後の20年です。で、あとその後30年というのは軽薄短小路線です。おもしろくなければテレビでない、軽いものがない、長大な、長いものとか厚いものというのは駄目だ、ダサイということと切り捨てていって、さまざまなものを失っていった。要は、捨ててですね、古いものを。さっき、島田議長さんがおっしゃったように、心まで破れたら何を償うことができるか、ものは壊れても、お金は失つても、また頑張れば何とかなるけれど、人間失格で心を失つた大衆社会の中で、いたい我々は何をしただいいんだろうかと思ひます。まさに私はその時代ではなからうかと

思います。経済復興して街を作り変えていって、日本が世界一の金持ちになった頃は目標があつたんですね、日本人は一生懸命頑張れた。でも、バブルがはじけて、いろんな価値観が壊れてしまつて、上も下もなくなつたときに、さて、これを建て直すには何をモデルにして、何をどういうふうに変えていいか、分からないわけです。私はそういうときにこそ、一握りの人たちがいますか、あえていえば、若者、茶髪の17歳に対して、銀髪の世代、我々がですね、もう少し真剣に、日本のあり方、文化のあり方、ものの考え方、価値観というふうなものを、やはり考え直さなければならぬのじゃないだろうか。この銀髪の象徴が私は小泉さんだろうと思うんです。なぜ小泉さんがあれだけ人気を確立したかという、彼なら何かやってくれそうだと。今まで、構造改革だ、やれ、なんだ、公共投資だと、10年間、失われた時代に何もなかった自民党が小泉さんだったら何かやってくれるという期待が若い人から年寄りまであるのではないだろうか。で、彼の銀髪世代といひますか、熟年の人たちが、あるいは、若い人でも、今の世の中おかしな感じがしないかと思う誰かが、やっぱり、それを変えていく必要がある。それは、みなさんのようなそういう地域のリーダーといひますかね、そういう人をおいてないのではないか。昔は、先生というのは、そういう宿命を背負つて、やっぱりやっ

てこられたけど、今は、先生はいつのまにかサラリーマンになっちゃったんですね。で、サラリーマンですと、やっぱり5時になったら帰らなきゃならないし、自分たちのやれる範囲しかやらない。そういう意味において、この無償の行為とかね、お金をもらわないけれども、やらざるを得ないという、そういうものを持ち合わせた人々が、私は日本の文化のありようとか、あるいは、祈りとか、あるいは、自分が何の役に立ってるか、というふうなことに気付く唯一の層ではなからうかと思ふんですね。で、戦後の平等社会というのは、確かにそりゃ美しくて、みんなが同じなんですけども、でも、平等っていうのは、良いことに対して躊躇するんですね。だから、突出して何かが出来るといけないんです。競争に勝てば、あいつは競争にいいことをしてる、いい子ぶりだ、というふうなことです。本当はいろんな個性が違って、その個性を切磋琢磨しながら、みんなが成長するのが当たり前ののに、個性を持つことが何か悪いことのように言われる。みんな平等で、みんな同じということが当たり前で、それがいいんだという時代、というのが大衆社会ですね。一貫して大衆社会の人たちは何を求めるかというと、物質的な幸せと社会的な平等を求めるわけです。だから、はみ出したり、やったり、よきことをしたりすると、それは人の足を引っ張るということで、引きずり下ろされる。で、

我々はいつのまにかそういうことに遠慮しながら、自分の主張もしないで、人々に遠慮しているけれども、もうこれからの時代というのはですね、やはり、自分の主義、主張、それから勇氣を持った時代の教育とかでですね、忍耐することの美しさとか、貧困に克つとか、贅沢は敵とか、そんな戦前の謳歌というんではなくて、人間本来のそういうものを取り戻さない限りは、日本はこの茶髪17歳の哲学に勝つことができないんじゃないかと思ふんですね。啄木、石川啄木が食べられない時代に、自分の命の儚さを詠んだ短歌がたくさんあります。「なんとなく汽車に乗りたく思いしのみ 汽車を下りしに 行くところなし」「東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる 頬につたふ 涙のごはす 一握の砂を示しし人を忘れず」。石川啄木の生まれたのは本当に貧しい時代で「はたらくけど はたらくけど お わがくらし 楽にならざる じつと手を見る」というふうには、生きることも一生懸命生きたくれども生きていけない時代と違ひまして、今はどんなに不況でも、食べられないということはないわけですね。その食べられないことがないと同時に、あらゆるものがありすぎて、ありすぎることによって、逆に貧しい人間が出来ていくんではないだろうか。だから、ある意味では、あの石川啄木が悲しんだあの精神風土というものをもう一度、この豊かな時代にフィルター

にかけて、いったい何が自分の敵なのか、何に勇氣を持って言えばいいのか、堕ちた偶像をどういうふうにするか回復できるか、ということ、どうぞみなさまの力量で考えていただきたいと思ふんですね。そういうふうにしなれば、二十一世紀がスタートいたしました、ほんとにこれから日本は情報化社会とか言われておりますが、このままだと、私は国が滅びるんじゃないだろうか、国はありますけれど、人々が、本当にこの国に生まれてよかったと思う人がいなくなるんじゃないかと思ひます。で、未来というのは我々に与えられた、地球上の人々に与えられた未来なんですけど、日本ほど、なんかいろんなものを失って、捨てて反省をしない国民はいないんじゃないかと思ふんですね。それについても、貧しい時代の特定の運命に遭った人ものを見ながら、自分でこれからの日本に何が欠けているのか、子供たちに何を伝えたいのかということはどうぞ、みなさんで、みなさんはリーダーシップをとられる位置にあるわけですから、そういうのを説教でもお話しただければ、私の今日、お会いしたことも意義があるんじゃないかろうかと思ひます。あるいは、何かご質問がありましたら承らせていただきたいと思います。とりあえず、私の話をこれで終えさせていただきます。ありがとうございます。

山口教区での研修報告

山口県議 藤谷 光信

全国の地方議会議員や首長で、本願寺の僧籍をもつ者の組織である龍谷顕真会は、毎年、本山において、年一回の研修総会を行っています。大学関係者やジャーナリストや福祉の関係者などを招いて講演を聞き、地方において活躍する上で大切な糧として、これまでも色々と蓄積をつんできました。

ご本山での総会研修は、ご開山様の御影に額ずき、全国の同志と共に情報交換するのは有意義で貴重なものです。平成13年度はそれに加えて、地方で集い、地方の生の声を聞き、見聞をひろめるのもよいことではないかとの



代表世話人挨拶

ご意見で、山口教区で行いました。

8月2日、山口県小郡町の山口別院に41名の会員と関係者が集まり、読経、教務所長の挨拶ののち、山口放送元常務取締役磯野恭子さんのお話を聞きました。

磯野さんは、安芸門徒の出身で、広島大学を卒業してKRY山口放送に入社し、人間魚雷「回天」や「原爆の子」「中国残留婦人」など数々のドキュメンタリー番組を作られ、その功績で「紫綬褒章」をうけられた方です。先生の作られた作品のビデオをまじえてのお話は、多くの人に感銘を与えました。

その夜は、全員山口市湯田温泉の有名な「松政」で懇親会を行いました。山口教区は顕真会員も多く、県・市・町議会議員合わせて十名も在籍しておられます。当日も、山口県議会議長島田明氏（防府市善正寺住職）も同席され、50年前のご本山や龍大時代の話など聞かせていただき、話に花が咲きました。

翌日は、「山口きらら博」見学、維新のふるさと「萩」視察など、それぞれ楽しく視察研修を自主的に行いました。「山口きらら博」は入場予定者200万人を大幅に上回る251万人を記録し、多くのボランティアの「元気」により成功を収めました。

顕真会の地方研修も、これから隔年ごとに行う予定にしていますので、この点について何かご意見がございましたら、お寄せ下さい。



島田明第2ブロック会員代表挨拶

平成13年は、9月11日の米国同時多発テロの発生で、海外視察（カナダ開教区）が取り止めとなったのは残念ですが、今後も海外研修、地方研修、本山参拝、総会研修など内容のあるものにしていきたいと思っています。

講演を聴講して

金城町議 竺川 紹隆

今年度、第1回研修会は初の試みとして会場を京都でなく地方へ移して行われた。

代表世話人の地元でもあり、折しも山口きらら博が開催中ということで、第2ブロック



お朝事風景（竺川世話人法話）

の山口県が会場となった。

酷暑とも猛暑とも言われる暑さは自然が発する警告ではないかと感じたのは私だけではなかったと思う。

「いのちきらめく未来」というきらら博の理念が実感できなかったのが少し残念であった。

初日にあった講演は、山口放送顧問の磯野恭子さんによる「ドキュメンタリーで綴る戦後50年」と題してお話であった。

主として終戦直前の人間魚雷や特攻隊など、壮絶とも言える当時の若者の生き方、そして死に方、また彼が残した多くのメッセージであった。

特定の運命に出逢った人の生き方に一緒に学ぼうとされたのではなかったか。

人の生き方や死に方は、壮絶であればあるほど時として美化される。

戦争は国益という名のもと特に美化され、そうすることによって戦意を高揚させていったのである。

そして、それをより強固なものとするため、その手段として天皇制宗教である国家神道が、決定的な役割を果たしたのである。

靖国神社問題の原点はここにある。

いくら美化したとしても戦争はあくまで殺戮であり略奪である。

そして、それは悲しみそのものでしかない。決して美しい事でもなく、すぐれた事でもないのである。

その悲しみを人間が自ら作り出す行為なのである。

「悲」という字はその語源をサンスクリットで「カルナー」と言い、うめき声とか溜め息という意味を持つそうだ。

替わることの出来ない人生を持ち、無力無能な私達が他者に対して思いがいくら深くても大きくても、実はかけるべき言葉もなければ、してあげられることもない。

ただそばに寄り添い、手を重ねながらそこにあるのはうめきや溜め息でしかない。

これこそが真の思いやりや優しさであった

ことに気付かされる。豊かさの中の貧しさと言われる今日、私達が失ったものの正体は悲しみという感情ではなかったか。

悲しみと言う感情の回復こそが人間性の回復であると言えるのでは。

神道は何の抵抗感や違和感、また問題意識を持つこともなく、そして悲しいという感情もなく、人間性の回復とは極めて至難の術ではないか。

戦争に学ぶべきことは、この大切な悲しみという感情までも、自ら押し殺しながら生きなければならなかったということではないか。

戦争という悲しみは、人間性回復のための悲しみではなく、人間性を否定した悲しみであったことをあやまりなく直視すべきである。今、法語カレンダーが壁にかかっている。

8月だ。そこには

悲しみの深さのなかに

しんのよるこびがある

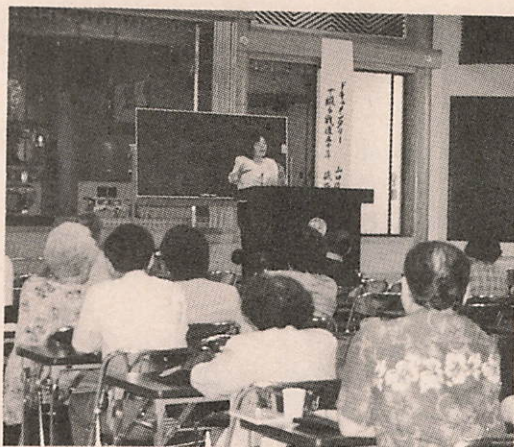
という言葉がある。

如来の大悲と示された宗祖のお心がいただける。

講演を聴講して

御津町議 小泉 玲子

随分前から「第1回龍谷顕真会研修会」を楽しみにしていた私達一行8名は、レールス



記念講演

ターでさわやかに姫路駅を出発した。旅は若返りの源かも知れない。まるで小学校が旅行するかのようにはずませ、永らく会わなかった者のように会話がはずみ、気が付けば早くも小郡駅到着である。駅では、帰りのお土産探しも楽しく、あれもこれもと目星をつけ別院に向かった。

冷房のよく効いた（効きすぎかも？）準備万端整った本堂でホッと一息。お香の薫りもすがすがしく尊前に進みお参りした。

磯野恭子先生の「ドキュメンタリーで綴る戦後50年」を聴講し、戦前戦後を生きてきた私は胸が詰まった。あれから50年余、日本の国は豊かになり、平和の甘い「時代」にどっ

ぷりとつかっているうちに記憶の風化が起こっていることを実感した。「堪える」ことを知らない若者たち、不満があればすぐキレてしまう少年、いや、今やいい大人達も含めて新聞紙上で毎日と喋っている程恐ろしい事件や、愚かな犯罪が目につく。

今日の私の豊かな生活に感謝し、その基盤になって下さった多くの方々のご苦労を偲びつつ、戦争の悲惨さと無意味さ、特に核の恐ろしさを次世代に語り継がなければならぬという責任のようなものを感じたことであつた。

今なお世界のあちこちで戦争が起こり、対立が後をたたない。「世界はみな同朋（きょうだい）」の教えに従い、真宗門徒から、家庭から平和を発信していきたいと決意を新たにされた貴重な1時間半であつた。

帰りの新幹線の中で参加者に感想文を書いていただいた。

永井 政子

ドキュメンタリーで戦争の恐ろしさに、50年経った今なお原爆の悲劇が終わっていない。核のない二十一世紀になってほしい。お話を聞いて心の成長をさせて頂きました。きらら博、萩観光、とても楽しかったです。お世話下さった皆様方ありがとうございました。

野間 重子

ドキュメンタリーで綴る戦後50年という講題で磯野恭子先生にお話をいただきました。戦後生まれの私は先人のご苦労を知り、改めて現在の平和な日本に生活させていただいている喜びと感謝をさせていただく貴重なひとときでした。

荒神 艶子

龍谷顕真会第1回研修会に参加させていただきました。山口別院での戦後50年の映画とお話に感動しつつ、二度と戦争の起こらない世の中であってほしいと願っています。またこんな機会があれば参加させていただきたいと思っています。ほんとにありがとうございました。

永井 一恵

龍谷顕真会研修会に参加させていただくことができましたこと、ほんとにうれしく思っています。講演、映画を見せていただき命の大切さをひしひしと感じました。現在の子供達の中には命を粗末にする子、人を傷つけることを何とも思っていない子が、毎日のように報道されます。命はどんなに大切か自分一人のものではない。と後々伝えていかなければならないと思いました。

井田 ヤエ子

原爆の恐ろしさ、戦争の悲しさを再確認しました。平和が続けば戦争の悲惨さを忘れがちになります。世界を見れば、今なお核爆弾・ミサイル等を保有し、実験を繰り返している国がたくさんあります。「日本は二度と戦争を起こさない」この姿勢を貫いた政治を願いたいと思いました。

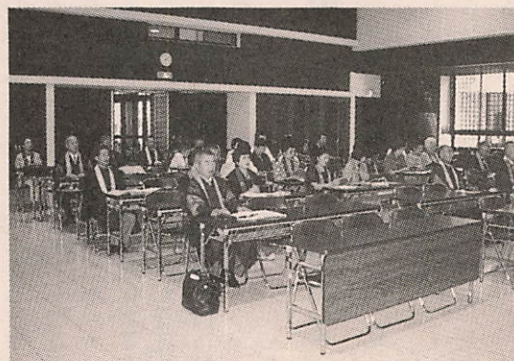
往きにも増してのはずんだ会話のうちに、今回の研修旅行が「とても有意義だった」「参加させていただいてよかった」との意見をいただき、みんな疲れた様子もなくそれぞれの家路に就いた。

研修会に参加して

札幌市議 柴田 薫 心

①講演を聴講して

勉強になりました。ビデオも大切でしたが、もう少しレジュメの通りお話を聴きたかった。しかし、磯野先生は放送局の方、我々は地方議員。そのハンディは質問の中にもあったが、元々難しいところである。議論をすれば本願寺の僧侶としての二重人格者である故に、私のように自民党札幌市連の会長代行をしている身であれば、組織にも影響を与えることになる。故に聖人の立場に立って、詰めた話



熱心に聴講する参加者

を聞きたかったし、二十一世紀の我々の歩む道をご教示願いたいと思った。全体的には良とする。

②きらら博を視察して

面積という広さは申し分ないが、博覧会としては物足りない。良とするところは海と丘の取り組みで、あとは期待したほどでない。

③その他

初めての地方研修会でしたが、会長としての御苦労、感謝致します。これからも地方に本願寺と政治、信心と地方議会、念仏と二十一世紀に、そして築地本願寺の国会議員との勉強会のあり方等も知りたいと思う。

研修会に参加して

市川町議 藤本 和人

入会して6年になり、初めて顕真会に参加したのが今回の研修会でした。

お世話くださった山口県の方々、経費の面からのご心配をかけたことと思い、感謝いたします。

山口別院での講演も時宜を得て極めて意義あることだったし、きらら博など思いもよらぬことでした。

不思議なご縁を結ばせていただき、「仏法



きらら博協会関係者からの概要説明

弘まれかし、世の中安穩なれ」と、地方の一隅でそれぞれががんばっている同志を憎からず思い、向後もできるだけ参加するつもりです。ありがとうございます。

講演を聴講して

豊浦町議 片山隆昭

二十一世紀への伝言としては、大変に困難な大切な大事なことでないだろうか。確かに歴史的事実を素直に伝えることの大切さを感じる。戦後56年経過した今日に於いて、歴史的偏見を知らされてきたことにも問題を残す要素がある。



講演後の質疑応答

社会、政治に於いても、平和と経済文化とが何か違和感を感じさせる。戦後56年も経過すると、歴史観も異なったことになる。事実を正しく伝えることは、一番大切なことでありながら難しいことである。

しかし、大切なことである。現代社会にても、約半数近い国民が戦争を知らない人達であり、また同居家族制度から核家族生活に変わって、戦後の動乱を物語りに受け取り、苦しみと悲劇の実感を知ることが出来ない事実。それは、いつの時代でもそうであるが、人間の命の尊さに気付く時に、本当の平和を知ることが出来るのではないだろうか。今日社会は物質文明の世の中に何に不足ないが、心の安心感是不安定なものでなろうか。

これからの産業経済の中で、何を求め、何を抛りどころとするのであろうか。大きく変化する時に、宗教の存在が問題化するのではないだろうか。二十一世紀に伝える言葉としては、平和と命の尊厳を考える時代になったと思う。

山口きらら博に行って

荒木世話人親族 草場夏帆
(小学四年生)

8月3日、山口きらら博に行きました。きらら博は東京ドームの8倍だったので、とても広かったです。広すぎだったので、き

ららバスに乗り、バスで見て回る事にしました。

その日は暑かったので、帰るころにはクタクタでした。でも楽しかったです。

きらら博は9月までなので、「もったいないなあ」と思いました。

きらら博に行って思った事を俳句にしてみました。

「きらら博 東京ドーム8倍だ」

「きらら博 全部まわるの大変だ」



元気いっぱいの夏帆ちゃん（左から2人目）

龍谷顕真会第1回研修会参加者名簿

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
					世 話 人	会 員										世 話 人		世 話 人	会 員	会 計 監 査 員	会 役 職
菅 野 和 代	野 間 重 子	永 井 政 子	永 井 一 恵	荒 神 艶 子	小 泉 玲 子	藤 本 和 人	下 坂 福 良	下 坂 富 美 子	樋 口 な を の ぶ	樋 口 美 鈴	樋 口 覚	梅 津 彩 香	梅 津 正 輝	梅 津 正 文	梅 津 君 代	梅 津 正 純	山 田 眞 智 子	山 田 眞 澄	嶋 田 政 憲	柴 田 薫 心	氏 名
兵 庫	兵 庫	兵 庫	兵 庫	兵 庫	兵 庫	兵 庫	滋 賀	滋 賀	滋 賀	滋 賀	滋 賀	滋 賀	滋 賀	滋 賀	滋 賀	滋 賀	東 海	東 海	福 井	北 海 道	教 区
網 干	網 干	網 干	網 干	網 干	網 干	神 崎	山 東	山 東	山 東	山 東	山 東	山 東	山 東	山 東	山 東	山 東	山 員	山 員	福 井	札 幌	組
浄 泉 寺	浄 泉 寺	浄 泉 寺	浄 泉 寺	浄 泉 寺	浄 泉 寺	妙 楽 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	寶 安 寺	浄 源 寺	浄 源 寺	本 覚 寺	宝 流 寺	寺
	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	
	世 話 人			世 話 人	会 員	会 員	会 員	会 員	会 員	会 員						代 表 世 話 人	会 員	世 話 人			会 役 職
	傍 示 暢 昭	草 場 夏 帆	荒 木 邦 枝	荒 木 行 也	井 上 隆 純	片 山 隆 昭	川 越 正 信	秋 里 勝 道	弘 中 正 俊	島 田 明	甲 方 勝 雄	内 田 光 昭	藤 本 久 子	蔵 田 和 子	藤 谷 允 子	藤 谷 光 信	櫻 井 賢 三	竺 川 紹 隆	三 村 英 子	井 田 ヤ エ 子	氏 名
	佐 賀	福 岡	福 岡	福 岡	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	山 口	安 芸	山 陰	兵 庫	兵 庫	教 区
	巨 瀬	三 門 南	三 門 南	三 門 南	豊 浦 西	豊 浦 西	美 祢 西	美 祢 東	防 府	防 府	岩 国	岩 国	岩 国	岩 国	岩 国	岩 国	佐 伯 奥	福 屋	網 干	網 干	組
	正 見 寺	阿 弥 陀 寺	阿 弥 陀 寺	阿 弥 陀 寺	正 音 寺	心 光 寺	西 音 寺	明 楽 寺	乗 円 寺	善 正 寺	教 蓮 寺	教 蓮 寺	教 蓮 寺	教 蓮 寺	教 蓮 寺	教 蓮 寺	正 向 寺	浄 光 寺	浄 泉 寺	浄 泉 寺	寺

平成13年度

事業報告

4月11日(水)
会計監査

4月17日(木)

世話人会(第一回)

5月25日(金)

世話人会(第二回)

5月25日(金)

平成13年度総会

功労者表彰式

表彰者 川越 證真 前代表世話人

(山口・美祢西・西音寺前住職)

記念講演

講師 中垣 昌美

(龍谷大学名誉教授・

四天王寺国際仏教大学教授)

講題 「仏教社会福祉の可能性」

懇親会

会場 木のぶ(下京区新町通仏光寺下ル)

8月2日(木)～8月3日(金)

第一回研修会

担当 第二ブロック

会場 山口別院、山口きらら博

記念講演

講師 磯野 恭子(山口放送顧問)

講題 「ドキュメンタリーで綴る戦後五十年」

1月11日(金)

世話人会(第三回)

会 員 動 静

新会員

弘中 正俊

防府市議・一期
山口・防府・乗田寺住職

片山 正純

諫早市議・二期
長崎・諫早・明教寺住職

井上 馨

勝山市議・一期
福井・円陵・敬教寺衆徒

大塚 泰雄

安曇川町議・一期
滋賀・高島・通安寺住職

退会会員

櫻井 賢三

湯来町議
安芸・佐伯奥・正向寺住職

龍谷顕真会事務局より

会費・特別会費納入のご依頼

会費・特別会費未納の方は事務局までご連絡の上ご納入くださいますようお願いいたします。ご不明の点、ご確認されたいことなどございましたら事務局までご連絡ください。

会員加入促進のご依頼

地方自治体の首長・議員に公選された宗派の僧侶の方で、本会に加入されておられない方をご存じでしたら、加入をご推奨いただくと共に事務局までご連絡ください。

公職選挙宗門推薦について

今後選挙の施行があり、立候補を予定されている方は、宗門推薦をいたしますので、事務局までご連絡ください。

編 集 後 記

本年2月10日付にて、事務局長神山佐夜子(広報部長)が定年退職し、後任として富永慎秀が就任いたしました。前任者共々変わらぬ御厚誼をお願い申し上げます。
尚、本表紙挨拶原稿は、神山が在職中執筆いたしましたものであります。